

1 研究主題について

(1) 研究主題

「分かった」「できた」を引き出す授業づくり
～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業～

(2) 主題設定の理由

通常学級には、発達障がいの可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒が在籍している。平成24年度に行われた文部科学省の調査からも、通常の学級に学習面や行動面で、著しい困難を示す児童生徒が6.5%が在籍している可能性があると言われている。そのような児童も含め、すべての児童が共に学び、「分かった」「できた」という満足感を得られる授業を目指す上で、「ユニバーサルデザインの授業づくり」を取り入れることにした。ユニバーサルデザインの授業づくりとは、「すべての児童生徒が『分かる』『できる』ように工夫・配慮された授業」のことである。具体的には、教科のねらいや指導内容を踏まえ、授業そのものを分かりやすくすること。障がい特性を踏まえた指導・支援の充実を図ることである。障がい特性を踏まえた指導・支援の充実とは、障がいのある児童生徒にとっては「なくてはならないもの」、障がいのない児童生徒にとっては、「あると便利なもの」である。

そこで、通常学級の教科教育に「特別支援教育の視点」を取り入れ、教師の教えたいことを子どもの学びたいことに変える、子どもの視点に立った授業づくりをめざそうと考え、本主題を設定した。

(本校は平成29年度に、岐阜県教育委員会より、発達障がい児童生徒支援事業「ユニバーサルデザインの授業づくり」の指定を受けている。)

(3) 願う児童の姿

本研究における目指す児童の姿を次のように捉えた。

- ・教科の基礎基本を確実に身に付け、主体的に学ぶ。
- ・学ぶことの楽しさを感じ、学習への意欲をもって、追究し続ける。
- ・仲間の良さを認め合い、ともに学び合いのなかで自他を高める。
- ・「分かった」「できた」という自信や満足感をもつ。

2 研究内容について

(1) 研究仮説

学習のねらいをしぼり、授業の構造化を図り、予想される児童のつまづきをもとにユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導・支援の工夫をすることにより、児童が主体的に楽しみながら授業に参加し、「分かった」「できた」という満足感の得られる授業をつくることができる。

(2) 研究内容（視点）

- ① ねらいを達成させるための授業の工夫（教科の本質から）
- ② 日常の実態把握に基づいた支援の工夫
- ③ すべての子が分かりやすい授業にするための工夫（UDの視点から）

(3) 研究の具体的方途

- ① ねらいを達成させるための授業の工夫（教科の本質から）
 - a 題材指導計画の工夫
 - b 一単位時間の工夫
- ② 日常の実態把握に基づいた支援の工夫
 - a 抽出児を中心にした実態把握
- ③ すべての子が分かりやすい授業にするための工夫（UDの視点から）
 - a 焦点化、視覚化、共有化を生かした授業の工夫

3 実践事例

- (1) 実践 6年生 題材名「和音の美しさを味わおう」(星の世界・雨のうた・和音の音で旋律づくり)
 学習課題：合唱や合奏を通して、和音の美しさを味わい、和音にふくまれる音を使って、旋律をつくろう。
 共通事項：「和音の響き」「調」「音の重なり」「旋律」を感じながら、歌ったり、演奏したりできる。まとまりのある旋律にするため、「反復」「変化」を取り入れて旋律をつくる。

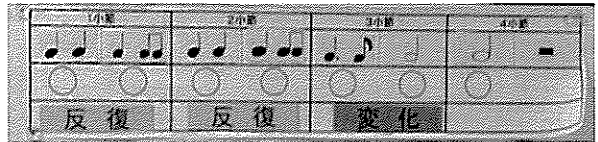
① ねらいを達成させるための授業の工夫（教科の本質から）

a 題材指導計画の工夫

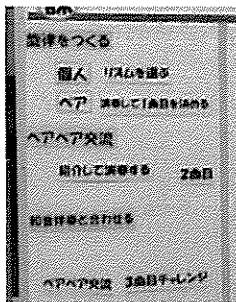
「星の世界」では、合唱を通して和音の響きの美しさを味わい、「雨のうた」では器楽合奏を通して和音の響きの美しさを味わったり感じ取ったりした。そして、前時までの学習を生かして、創作活動を位置づけた。和音に含まれる音を使って旋律をつくることで、より和音の移り変わりや和音の響きの美しさを味わえるようにした。

b 一単位時間の工夫（ねらいや学習活動の焦点化）

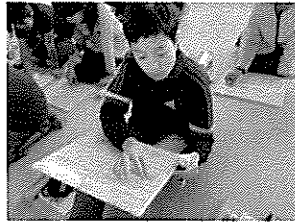
- ・2分音符のリズムを工夫して、「反復」「変化」を取り入れながら、まとまりのある旋律をつくることをねらいとした。2分音符のリズムを4種類に絞り、2分音符のカードと入れ代えて操作できるようにした。また、反復、変化のカードを色で分け、自分で貼りながら考えることで、意識してまとまりのある旋律をつくることができた。



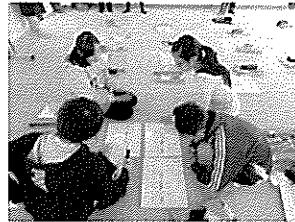
- ・「旋律をつくる」「つくった旋律を紹介し合う」「和音伴奏と合わせる」といった活動の流れを明確にし、黒板に位置づけた。



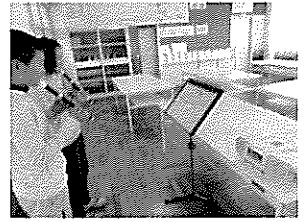
<旋律をつくる>



<ペアペア交流>

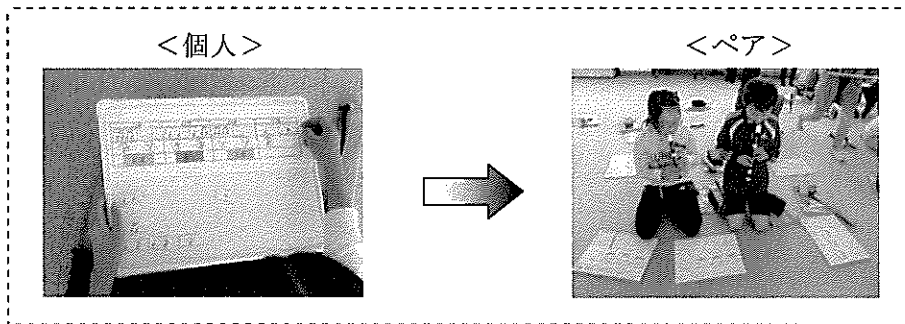


<和音伴奏と合わせる>



◎見通しをもち、主体的に次の活動に取り組むことができた。

- ・個人からペアへの活動を取り入れ、一人一人の思いを位置づけた。



◎まずは、一人一人がホワイトボードを使って、カードを操作し考えることで、オリジナルの旋律をつくることができたという喜びや達成感を味わうことができた。つくった後は、それぞれの旋律をペアで演奏し、どちらの旋律で交流するかを決めた。初見で演奏することが難しい児童も、ペアに支えられながら、旋律を確かめることができた。

② 日常の実態把握に基づいた支援の工夫

a 抽出児を中心にした実態把握

- ・音楽活動における自己評価やワークシート、行動観察をもとに支援の必要な児童を抽出した。

A児
課題に対して、一生懸命取り組む姿も見られるが、苦手だと感じたり、つまずいたりすると、意欲が低下してしまう面が見られることがある。

B児
リズムに合わせて、楽しく歌うことができるが、理解力が低いため、見通しをもって活動したり、短時間でリコーダーを演奏したりするのが苦手である。

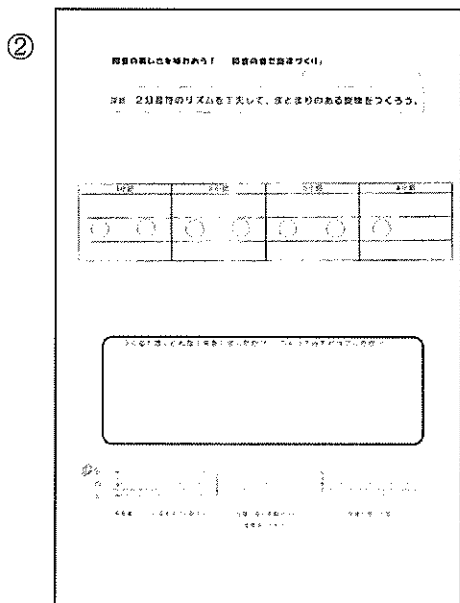
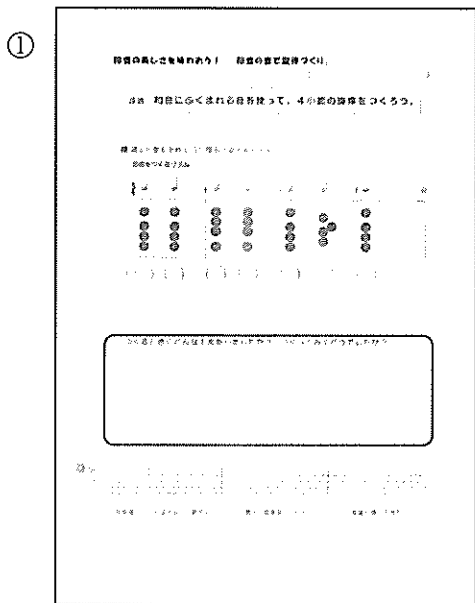
- ・児童の音楽への興味・関心や学び方の特徴を日常的に観察・把握し、支援方法を決めていった。
- ・児童の人とのかかわり方を日常的に観察・把握し、ペアの編成を行った。

◎抽出児の予想される姿を具体化し、支援の工夫を行うことで、主体的に取り組むことができた。また、意図的なペア編成により、支え合う姿が見られ、活動が活性化した。

③ すべての子が分かりやすい授業にするための工夫（UDの視点から）

a 焦点化、視覚化、共有化を生かした授業の工夫

- ・児童が一単位時間の見通しをもてるようにするために、流れのプレートを用意した。
【焦点化・視覚化】
- ・旋律づくりのためのワークシートを用意した。
①和音に含まれる音を選び、つなぐことで音の高低が分かるもの。
②2分音符のリズムが工夫できるよう、リズムを選び記入できるもの。【視覚化】

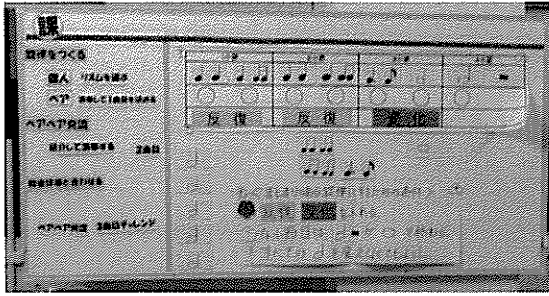


- ・旋律づくりのための条件を掲示し、活用できるようにした。【焦点化・視覚化・共有化】

＜まとまりのある旋律にするための条件＞
* 「反復」「変化」を入れる。
* 4小節目は2分音符・2分休符か全音符で終わる。
* すべての2分音符を変えなくてもよい。

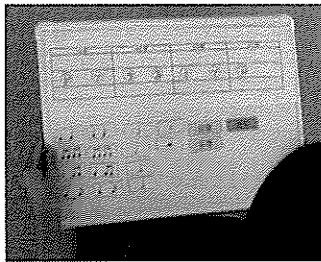
◎条件を提示することで、共通理解ができ「反復」「変化」を取り入れた、まとまりのある旋律をつくることができた。

- ・ワークシート、リズムカードを拡大し、旋律づくりの活動の流れを示した。【焦点化・視覚化】



◎児童がつくったものをモデルにし、2分音符をリズム音符に入れ代えたり、反復、変化をどのように組み合わせるか、黒板で操作させることで、具体的なイメージをもつことができた。

- ・組み合わせを考えるためのリズムカードを用意した。【視覚化】



◎一人一人にホワイトボードと、リズムカードを用意したことで、主体的に旋律づくりを行うことができた。

ペアペア交流や、和音伴奏に合わせる活動では、持ち運びやすく、スムーズに活動を行うことができた。

- ・お互いの良さを認め合うため、ペアペア交流を位置づけた【共有化】
ペアで練習した後、ペアとペアの交流を行った。

◎「1小節目と3小節目を反復にして、2小節目を変化させました。4小節目は、4分音符にして、終わる感じにしました。」など、自分たちが、まとまりのある旋律にするために、どのように工夫したかを話すことで、話して手も聞き手も、課題を意識することができた。また、自分たちと違う旋律を聴くことで、リズムの組み合わせによって、いろいろな曲をつくることを実感し、認め合うことができた。また、和音伴奏に合わせて演奏をする前に、他のペアと交流することで、自分たちの演奏に自信がもて、和音伴奏と合わせる活動では、伴奏の拍に乗って演奏することができた。

- ・環境の設定【焦点化】
和音伴奏のCDを4カ所用意した。(廊下パソコン室前、廊下音楽室前、被服室、音楽準備室)

◎静かな場所で演奏することで、自分たちの旋律と和音の響きの美しさを感じることができた。



4 成果と課題

- 一時間の流れを示したことで、見通しをもち、ゴールに向かってどの子も主体的に取り組むことができた。
- 抽出児の予想される姿を具体化し、支援の工夫を行うことで、「分かった」「できた」という満足感をもつことができた。
- 一人に一組のリズムカード、ホワイトボードを用意したことで、一人一人が意欲的に旋律づくりを行ったり、仲間と交流したりする姿が見られ、視覚化されていることで仲間と比べ合ったり練り合ったりすることができた。
- △他の題材(教科)でも、UDの視点から分かりやすい授業にするための工夫を行っていく必要がある。

5 課題克服のための今後の方向

- ・抽出児をあげ、予想される姿をもとに、どの場面で、「焦点化、視覚化、共有化」するか、授業における工夫や支援の工夫をさらにを行い、有効性を確かめ、他の児童の指導法としていきたい。